

ごあいさつ

会長 山岸 哲

1993年10月より鳥学会会長に就任いたしました。あらためて「学会とは何か」と考えてみますと、「科学する者と科学しようとする者の会」と私は考えています。科学する者とは誰を指すのでしょうか。「研究の成果を科学雑誌（ジャーナル）に科学論文として発表・公表する者」が科学する者である（以後、科学者と呼ぶことにする）と思います。研究の成果を公表し、他の研究者の客観的な批判や同意を得、その新しい発見や新しい考え方を他の研究者と共有しない限り、科学したことにはならないと思うのです。私のこの定義によれば、研究によって生計を立てているか否かは、科学者かどうかの基準ではありません。研究によって生計を立てている者が科学者になりやすい条件を備えているとはいうものの、研究機関に身を置きながら科学者の責務を果たしていない方もおられますし、在野の方で、立派な論文を書かれている科学者もおられます。その科学者たちがお互いの研究を出し合い、互いの優れている点を学び合い、誤りについては批判し合いながら、切磋琢磨して更に向上していくのが学会の正しいあり方だと思っております。この際に、分子生物学、細胞学、組織学、生理学、遺伝学、形態学、分類学、神経学、心理学、生態学、行動学、社会学など多方面の学問分野の科学者が論議し合うことが、鳥という動物を総合的に理解するためには必要なことと思います。生態や行動の研究者が会員構成の大半を占めている現状は、あまり好ましい状況とは言えないのではないのでしょうか。そうしたら、生態学や行動学以外の分野の鳥の研究者に鳥学会にもっと積極的に参画していただくのを真剣に考えるときがきていると思います。

さて、今回会則が変更され、次回から会長も直接選挙となります。変更の主な理由は、「会員には会長を選ぶ権利がある」という主張でした。そうした民主主義のルールに乗っ取ったやり方



ごあいさつ

に、私は諸手をあげて賛成いたします。しかし、一方で、学会員には果たすべき一定の責任があります。それは、いうまでもなく、科学者たること、あるいは科学しようとする者たることです。学会員としての責任を果たす人々の間でこそ真に民主的な選挙がおこなえるのではないのでしょうか。どうか論文を書いて下さい、あるいは努力をしてください。

最後に、自然保護と学会のあり方について考えていることを申し上げます。今回自然保護に強い関心を寄せられている藤巻氏に、副会長をお願いしたこと、また「鳥類保護委員会」を新設して、保護の問題に対処しようとしていることからもおわかりのように、私はかけがえのない自然を守るために、鳥学会は学会として最善の努力を払うべきだと考えております。ただし、学術的な調査・研究の面から、科学的に自然保護に役立っていくのが鳥学会の使命であると考えております。これに関して、昨今の大会時の自由集会の全てが本当に学問を中心にすえて討議が行われているのかどうか反省すべきところもあるのではないのでしょうか。大会の評価は参加人数でなされるべきではありません。その学問的内容が問われるべきでしょう。

森岡前会長は、日本鳥学会の会則や機構など、器の面からの大きな改革に尽力されました。そのご努力に心から敬意を表します。また、これまで本学会をかげで支えてこられた幹事の方々のご苦勞にたいし感謝し、学会のさらなる発展に努力いたしますので、よろしく会員の皆様のご協力をお願い申し上げます。

第6回国際ライチョウシンポジウムに参加して

藤巻裕蔵

1993年9月20～25日にイタリア北部のウディネ市のウディネ大学で開催された第6回国際ライチョウシンポジウムに参加した。このシンポジウムは第1回が1978年にイギリスのインバーネスで開かれて以来、3年に1回開催されている。今回の参加者は16か国から92名であったが、そのうち最も多かったのは地元のイタリアの39名で、アジアからは中国2名、日本1名（多分日本から参加はこれが初めて）であった。

今回のテーマは個体群変動（20題）、行動生態（16題）、生息場所管理（17題）、エゾライチョウの生態（6題）であった。個体群変動では、長期にわたる個体群変動、変動の周期性、天敵の重要性、狩猟圧などについて、行動生態では天敵に対する行動、レックなどにおける繁殖に関連した行動、婚姻システムなどについて、生息場所管理では林業との関連で、単一樹種人工林の面積増大や生息地の断片化などに関するものが主な発表内容であった。

会期は5日間であったが、うち1日はエクスカッションであったので、発表、討論は正味4日間である。シンポジウムの進行は、最初の2日間は、午前中に講演、午後にポスターとそれまでの発表にもとづくワークショップで、後半2日間はポスターとワークショップというものであった。会期のわりに発表題数が少なかったので、ポスターについても全体会議場で一人ずつ10分間口頭説明をし、これの終了後テーマごとの分科会で討論する形式がとられた（写真参照）。最後に、各テーマごとに座長が作成したワークショップレポートの骨組をOHPで示しながら討論し、さらに論議すべき点や追加するべき点などを書き込みながら、最終的な骨組をまとめた。これらの発表やワークショップレポートはOrnis Scandinavica（1994年からJ. Avian Biol.の新称）の一部として発刊される予定である。

今回参加して感じたことは、どの分野でも、ヨーロッパ諸国と日本の現状とを比べると、データの蓄積に格段の差があるということである。とくに個体群変動については長年の調査データがあり、人工林化や生息地断片化についても森林の取扱いと森林性ライチョウの関連が具体的に把握されている。ヨーロッパでは古くからライチョウ類が狩猟鳥として研究対象となってお

り、狩猟鳥獣の保護管理が林業の一部として行なわれてきたという歴史がある。多くの場合、森林の管理がそのまま森林性鳥獣の保護管理につながっているわけである。したがって、研究者の層が厚く、今回の参加者のなかでも林業の現場で野生鳥獣の管理を担当し研究するような職員もいた。このようなことが、データの蓄積の多い要因になっているのであろう。

日本ではライチョウが天然記念物に指定されたために、比較的よく調べられている。しかし、それでも研究例は少なく、またその多くが県など地方自治体による調査であるため、調査結果が全国規模で研究者の目にふれることがない。エゾライチョウにいたっては、それほど重視されていなかったためか、研究はほとんどなかった。また、日本で林業というと、もっぱら材木生産を目的としているため、森林施業では森林に生息する動物の生息環境保全・管理は考慮されていなかった。1993年の林学会大会で「森林施業と鳥獣管理」という自由集会があったが、このような意識はまだ林業の現場にはない。シンポジウム中日の23日にはエクスカッションでイタリア北東部のアルプスに行ったが、案内は営林署の職員であった。それは営林署が山で伐採を行なうと同時に狩猟鳥としてライチョウ類の管理も行なっているからである。実際見学した標高500～1000mは主に針葉樹林で、あちこちで伐採を行なっていたが、そのなかで樹木だけではなく、ライチョウ類の秋の食物として重要な林床の漿果類も含め、生息環境の維持についても考慮しながら管理するということがあった。1993年4月に施行された「種の保存法」によると、一部の希少種の保護管理のため、生息環境の保全や管理を行なうことになっている。環境庁の希少生物保護・管理事業以外に、林野庁も1993年度から森林生態系保護地域で希少動物の保護管理事業を開始した。やっと生息環境管理の芽が出始めたわけである。しかし、全ての野生動物にこのような考え方が適用されるのはたいふ先のことであろう。

今回のシンポジウムは1996年、開催地はカナダ（多分アルバータ大学）の予定で、新北区では初めての開催である。
(帯広畜産大学野生動物管理学研究室)



1994年度日本鳥学会大会のお知らせ

本年度の大会は、10月8日(土)・9日(日)・10日(月)に新潟県上越市の上越教育大学で開催されます。交通不便な所ですが、森の中の簡素な所です。多くの会員の方々の積極的な参加と研究発表を期待しています。

大会のお問い合わせ、申し込み先は：

〒943 新潟県上越市山屋敷1番地 上越教育大学自然系理科学生物学研究室

日本鳥学会1994年度大会準備事務局

Tel : 0255-22-2411. 内線472. 435. Fax : 0255-26-8408 (大会準備委員長：中村登流)

(大会案内は次号に掲載予定)

国際鳥学セミナー

A. P. Møller博士を迎えて

伊藤基金による第2回国際鳥学セミナーは、スウェーデン・ウプサラ大学のA. P. Møller博士を迎えて、10月11日の愛媛大学での鳥学会大会での一般講演を皮切りに、12日の大阪市立大学でのワークショップ、13~15日の東大秩父演習林でのワークショップ、そして16日の立教大学での一般講演と6日間におわたって行われた。デンマーク生まれのメラー（ミュラーに近い発音）博士は、ツバメにおける野外実験を含むフィールドワークをもとに、性淘汰に関する問題を幅広く扱い、精力的に論文を発表している研究者である。ツバメ以外にも彼の研究対象は広く、イエスズメ、オオタカ、キアオジ、さらにはほ乳類の精子競争に関する論文もあるし、最近クロサバクヒタキも調べているということである。また性淘汰における形態の非対称性という問題について、つい最近、独創的な仮説を発表し、世界の行動生態学者の注目を集めている。

大会1日目は旅行社の手違いで博士の到着が遅れ、一般講演は2日目の昼休みの短い時間帯に行われたが、よく準備された説明とスライドは、黒沢さんの流暢な通訳もあって、専門外の者にもわかりやすく、好評であった。大阪、秩父でのワークショップ、そして東京での講演については、堀田昌伸さん、石田健さん、藤田剛さんにそれぞれまとめて頂いた（下記）。また今回のセミナーを準備・運営していく中で、たくさんの方々の協力を得た。これらの方々から心から御礼を申し上げる次第である。

（世話人：樋口広芳・中村浩志・上田恵介）

大阪ワークショップ (10月12日・大阪市立大学)

堀田昌伸

「鳥における精子競争と性淘汰」と題されたMøller博士の大阪でのセミナーは1993年10月12日の午後、大阪市立大学理学部の会議室で開催された。鳥学会大会の翌日であったため人が集まるかどうか心配したが、大学関係者を中心に25名が参加され盛況であった。

演者が精力的に研究したツバメを中心に、一夫一妻性の種での見かけ上の夫婦関係と実際の交尾関係がいかに異なっているかという点を中心に話が進められた。社会的に一夫一妻である多くの種で、従来考えられていたよりも頻りに婚外交尾や婚外受精が見られている。その理由として、質の劣る雄と番いになった雌は、婚外交尾を利用して質の高い雄と交尾し、自分の適応度を高めようとしているのではないかということが考えられている。Møller博士はさまざまな証拠を示して、そのことをわかりやすく説明してくれた。講演は通訳なしでおこなわれたが、ゆっくりと話してくれ

たのでわかりやすかった。

(大阪市大・理・動物社会)

東京大学秩父演習林 ワークショップ (10月13~15日)

石田健

秩父でのワークショップは、埼玉県西端の奥秩父の谷間にある古い木造宿舎で、13日夕方から15日まで2泊するというゆったりした日程をとり、20人が参加して行われた。14日の午前中にメラーさんの講演「精子間競争」と質疑応答、午後に永田尚志・濱尾章二・中村雅彦・藤田薫の4氏によるウチヤマシマセンニュウ・ウグイス・イワヒバリ・ヤマガラ繁殖戦略に関する講演とそれぞれ質疑応答があった。講演と質疑は（ほぼ）すべて英語で交わされ、人によってはわかったこともわからなかったこともあったようだが、参加した誰にとってもよい経験になったことだろう。合宿形式の利点で2晩とも夜更けまで討論や雑談に花が咲き、自分の研究を考え直すヒントを得た人もあったようだし、メラーさんの私生

活(?) やら参加者の知られざる人間性などが明らかにされた模様であった。室内の行事がたいへん熱心にすすみ、秩父の自然をゆっくりみていただく暇がなかったのが残念だったくらいで、たいへんすばらしい催しになった。参加者一同から記念品も贈られ、メラーさんにとっても来日のよい思い出になったことだろう。(東大・秩父演習林)

最後にふさわしく、もりあがった セミナー

(10月16日・立教大学)

藤田 剛

残念ながら参加者は少なかった。たぶん、裏方も含めて15人くらい。けれど、中味はとっても充実していた。講演後の質問に対するミュラー博士らしい説明がじっくり聞けたからである。たぶん、ミュラー博士の性選択に関する考えが、もっとも整理されて出てきたのが、このセミナーだったと思う。

まずは講演、基本的には愛媛大でのセミナーと同じ内容だった。しかし、時間に余裕があった分、いくつか新しい説明がつけ加えられていた。つけ加えられた説明のほとんどは、優良遺伝子仮説、ハンディキャップ・モデル、そしてランナウェイ・モデルなど性選択のメカニズムを説明するモデル群の概要と位置づけについて。バラサイト・モデルの説明は、おさわり程度にとどめられていた。わかりやす

い説明だなあと、最初は関心するばかり。でも、どこか教科書にでてくる話とちがうみたいだぞ。どこがちがうんだ…? 考えているうちに、講演が終わってしまう。すると、そこに環境研の若き俊英永田尚志さんの天の声。

「今説明されたモデルや仮説の位置づけを、整理してもらえませんか?」学生時代にノートをとらないことが自慢だったこのぼくが(学生のころは、こんなくだらないことをよく自慢しあうものである)、あわててノートをとってしまったのは、ここだけの秘密である。残念なことに、今のぼくには、ここでミュラー博士の考えを要約したり、批判したりする能力がない。しかし、その場にいた多くの人たちが、性選択という問題について、意識を高められたことは確かだと思っている。

ミュラー博士の研究について、ぼくは部分的に理解しているだけである。その研究内容がどう評価されているのかまだ理解できていない。しかし、世界の第一線で仕事をし続けようとしている国外研究者の話を何度も聞くことかできたのは初めてであり、とにかく脳みそは刺激されまくった。そして、今回のような講演で議論に加われなくやささも、つくづく味わった。これは、何物にも変えがたい経験であったと思っている。

(日本野鳥の会・研究センター)



メラーさんを囲んでの熱心な討論風景(秩父)

日本鳥学会員近畿地区懇談会

第50回記念例会のおしらせと参加募集

日本鳥学会員近畿地区懇談会は今年最初の例会で50回を迎えます。そこで50回記念例会として下記の予定で記念講演会とエクスカージョンをあわせて開催し、広く日本鳥学会会員の参加を募集します。鳥類生態学の最前線の話と初夏の森のバードウォッチングを堪能できる企画となっています。ふるってご参加ください。

参加は予約制としますので、参加希望の方は下記の要領にしたがってお申し込みください。また、その際、参加予約金を払い込んでください。

なお締切日以前であっても、参加希望者数が定員（48名）に達し次第、参加申し込みの受付を終了します。

記

日時：1994年5月21日（土）～22日（日）

場所：軽井沢星野温泉ホテル（JR軽井沢駅よりバスで15分）

宿泊：同上、4人用ログコテージ（通常料金1人あたり25,000円の部屋）

宿泊費：20,000円＋少々（懇親会費こみ）

予定：21日 16：00頃ホテルに集合、この後記念講演会（中村浩志・信州大教授「托卵鳥と宿主の攻防戦」）と懇親会

22日 早朝より探鳥会、昼ごろ現地解散

申し込み締切：1994年4月20日

予約金：10,000円（参加をとりやめてもお返してきません）

予約金振り込み先：神戸3-63515、加入者名：日本鳥学会員近畿地区懇談会

申し込み方法：官製はがきに近畿地区懇談会50回記念例会参加希望と書き、住所・氏名・連絡先電話等を書き添えて下記の宛先まで申し込んでください。その際、部屋割りの参考にしますので、喫煙の習慣の有無を必ず明記してください（無記入の場合はたばこを吸わないものと判断します）。

申し込み及び問い合わせ先：〒651-13 神戸市北区藤原台北町4-10-16

江崎保男 電話078(982)8466（自宅、夜間のみ）

お 知 ら せ

【鳥類保護委員会】

1993年度総会において、鳥類保護委員会が創設され、私が取りまとめ役に指名されました。

我が国は鳥類だけを考えてもその半数以上が外国から飛来し、必然的に諸外国との関係を考慮しなければならない地理的条件下にあります。しかし、その一方で明治時代以降、島国という地理的特性に甘んじて、鳥獣関係法令を含め徹底的に各種の問題を処理して来ました。ところが昨今のクジラ問題、サケ・マス流し網問題、ウルグァイラウンドなどに見られるように、一国の利害だけを主張できない国際環境になって来ました。

鳥獣関連の近年における国際協調としては、1974年の米国との渡り鳥保護条約があります。その後、1980年には、英国に本部のある国際水禽・湿地研究局（IWRB）の各国代表者会議並びに第二回ハクチョウシンポジウムを、IWRB日本委員会というNGOの立場から、私が深く関わって札幌に誘致しました。このIWRBはまさにラムサール条約生みの親ですが、これを契機としてその年に日本政府がIWRBに加盟すると同時に、ラムサール条約並びにワシントン条約を批准しました。さらに1981年には日豪並びに日中との間で、また、1988年にはソビエトとの間で渡り鳥保護条約を締結しました。近いところでは、1992年6月にリオデジャネイロで開催された「環境と開発に関する国連会議」（UNCED）、所謂、地球サミットで「生物の多様性に

お知らせ

関する条約」が採択され、我が国は1993年にこの条約を批准しました。また、1992年にはUNESCOの世界遺産条約を批准し、翌年、白神山地、屋久島などを登録しました。1993年には、国内法として「絶滅の恐れのある野生動植物の種の保存に関する法律」が施行され、続いて同年6月には釧路で第5回ラムサール条約締約国会議が開催されました。

このように昨今の野生生物並びに自然環境をめぐる国際的な動きは風雲急を告げています。かかる情勢のもとで当学会に鳥類保護委員会が設けられたことは誠に時宜を得た措置であると思います。実は、この委員会は活動方針等を討議する時間的な余裕がなくスタートしました。従って、今後、構成委員相互間で協議の上、必要な活動を展開することになっています。

私個人の見解としては、当委員会は大局的な見地から我が国にとって必要な保護活動を展開する役を担っていると考えています。例えば、科学的根拠に乏しいままに進められている狩猟の見直しや、この根拠を得るため、鳥類といわず野生生物全般とその生息環境をも含めた自然環境を対象とした国立研究機関の設立推進や、まだ日の目を見ない近隣諸国との渡り鳥保護条約の批准など諸問題の推進役と認識しています。

我が国の置かれた立場や責任などを考えるとき、一致結束して世界の自然環境保護に貢献するのは当然のことと考えます。殊に、我が国と関係の深い渡り鳥の故郷である東南アジアを始めとする周辺諸国の環境保全、研究、教育、技術面の支援並びに関係維持は焦眉の急となっています。ただ、これまでのODAのように国民が汗水流して稼ぎ出した円を徒らに垂れ流したり、国際団体に盲目的に上納金を貢ぐのではなく、自主的に技術移転なり、ノウハウの伝達を行い世界のレベルアップを図るべきであると考えています。

この活動方針は飽く迄も私見であり、各委員の合意に基づくものではありません。今後、委員全員が一堂に会するのは、次期大会時となるでしょうが、その折りに十分な討議を行い、今後の活動方針の合意を得たいと考えております。これにかかる会員諸氏の建設的なご意見をお聞かせ願えれば幸いです。

(鳥類保護委員長 阿部 學)

【基金運営委員会】

○伊藤基金(国際鳥学会議に参加する日本鳥学会会員に対する補助金):今年8月にウィーンで開催される第21回国際鳥学会議に参加・発表するための補助金として、成末雅恵、浦野栄一郎、濱尾章二、堀田昌伸の4氏に各25万円を交付しました。

○津戸基金:鳥学会の持つ基金のひとつに津戸基金があり、その利子は、会員の企画されるシンポジウム(年一件)に補助金として使われます(鳥学会誌37巻4号参照)。補助金の額は3万円ほどですが、各地で格式張らない実のある小シンポジウムを1994年度に計画されておられる方は、1)シンポジウムのテーマ、2)開催地(可能なら会場名も)、3)責任者、4)講演者の氏名と演題、5)開催日時などを記して、遠慮せず申し込んで下さい。このうち、1)、4)、5)は暫定的なものでもかまいません。申込期日と申込先は次の通りです。なお、不明な点その他は下記の基金運営委員会委員長宛お尋ね下さい。

(基金運営委員長 正富宏之)

申込期日 1994年3月末日

申込先 〒079-01 美唄市光珠内 専修大学北海道短期大学 正富宏之

Tel. 01266-3-4321 Fax. 01266-3-3097

【編集委員会】

正・副編集委員長の選出:11月末に編集委員の互選による正・副編集委員長の選挙が行われ、委員長に斎藤隆史、副委員長に松岡茂が選出されました。学会誌の抱えている最大の課題は遅刊の問題であり、現在の遅れを取り戻すために、今後も一層の努力をしていく覚悟です。会員の皆様の活発な投稿を期待すると共に、学会誌に関する御意見がありましたら、私たち宛に是非お寄せ下さい。なお、投稿先は変更ありません。

〒305 茨城県稲敷郡茎崎町松の里1 農水省森林総合研究所鳥獣生態研究室 松岡茂
会員の皆様のご協力をお願いします。 (編集委員長 斎藤隆史)

【事務局】

- 小森厚氏から鳥学基金へ23,880円の寄付を頂きました。紙面を借りて感謝します。
- 鳥学ニュースNo.49でもお知らせした通り、事務局が大阪市立大学に移転しました。なお、会費の振込口座は従来通りの口座番号で変わりありません。
- 事務局移転に伴い事務局員として黒島妃香さんが、月・火・木曜日の午前9時から午後5時まで事務局に勤めます。
- 会則の大幅な変更が松山大会の総会で承認され、選挙事務の都合から今回に限り、会長任期を2年3カ月に、評議員任期を3年にすることもあわせて承認されました。詳しくは、日本鳥学会誌42巻1号をごらん下さい。
- 北海道利尻島調査研究報償費の公募が事務局に届きました。本年度の受付は終了しましたが、この公募については毎年行われていますので、興味のある方は下記の連絡先までお問い合わせ下さい。

〒097-03 北海道利尻郡利尻町法志字本町 利尻島町立博物館
Tel. 01638-5-1411 Fax. 01638-5-1282

- 長年にわたって学会の幹事を務めていただいた竹下信雄、川内博、唐沢孝一、福田道雄の4氏に会長から感謝状が贈呈されました。

- 1994年度役員及び諸係分担が以下のようになりました(氏名の後の*は委員長を指す)。

学会会長：山岸哲

副会長：藤巻裕蔵

常任評議員：阿部學・藤岡正博・樋口広芳

評議員：阿部學・藤巻裕蔵・藤岡正博・福田道雄・長谷川博・樋口広芳・唐沢孝一・黒田長久・森岡弘之・中村浩志・中村登流・中村司・竹下信雄・上田恵介・山岸哲

基金運営委員：樋口広芳・正富宏之*・森岡弘之・中村登流・中村司・山岸哲

編集委員：青木清・江口和洋・藤巻裕蔵・石居進・松岡茂・森岡弘之・中村浩志・斎藤隆史*・立川涼・上田恵介・浦野栄一郎・綿貫豊

目録委員：江口和洋・藤巻裕蔵*・石田健・川路則友・黒田長久・松岡茂・森岡弘之・中村一恵・中村登流・上田恵介・浦野栄一郎・綿貫豊・柳沢紀夫

用語委員：阿部學・長谷川博・黒田長久・正富宏之*・松岡茂・森岡弘之*・中村浩志・中村登流・中村司・山岸哲

鳥類保護委員：阿部學*・藤巻裕蔵・福田道雄・樋口広芳・唐沢孝一・中村司・山岸哲

IWRBJ (国際水禽調査機構日本委員会) 委員：柿沢亮三

ニュース編集係：江崎保男・堀田昌伸

監事：中村和雄・坂根隆治

鳥学ニュース No.50

1994年2月1日 発行 (会員配布)

発行 日本鳥学会

〒558 大阪市住吉区杉本3-3-138 大阪市立大学理学部動物社会研究室気付

TEL. 06-605-2607 FAX. 06-605-2522

発行人 山岸 哲

印刷所 唯丸二印刷

編集 江崎保男・堀田昌伸